

使い方がわからない人もいると思います。地域の財産として継続してってもらいたいという気持ちがあります。やはり、行政のバックアップが必要だと思います。医療側もケアマネジャー側も人が変わるので、医療と介護の連携とはなんぞやという説明会も必要だと思っています。圏外統一のものとなるといいなと思ってはいるのですが、実際、どうなのかなと思うところもあります。地域包括ケアと言われても何をしたらいいかわからないので、具体的な困り事を地域で解決していくという姿勢を、行政と続けていって欲しいなと思います。「うちは介護保険ですから。」というのは良くないと思うのです。医科点数表を実際開いてみて、医療側はケアマネさんと連携するとどんな診療報酬の得があるか調べた上で、先生方とお話するようにしていました。医療保険だから東北厚生局に聞いてくださいというのは、物事は進まないのだろうなと思います。お互いが半歩進んで、歩み寄っていかないと、医療と介護の連携はなかなか進まないと思うので。そういう地域であって欲しいと思いますし、そこを保健福祉事務所、保健所に期待するところだと思います。現在、ケアマネジャーさんの実地指導は市町に移行しているところもあります。連携連絡票や、介護と医療の連携は市町単独では難しいところもあると思いますので、ぜひバックアップをお願いしたいと思っています。

武田

連携連絡票というのは、今思い返すと実は薬剤師にとっては「夢のツール」でした。先生方とケアマネジャーさんと、情報を共有するってことがありそうでなかったことだったので、これが採用されたということは大きいことだと思います。これが今後、高橋さんが言っていたように、使い方を周知して、ずっと使っていけるように残っていったらいいなと思います。市立病院の先生もそうでしょうし、薬局の薬剤師も変わってしまう。変わっても連携連絡票はちゃんと使って、稼働しているという状況を地域で作り上げるというのが課題だと思います。

村岡

変わっていくたびに書くのが面倒くさくなるのは困るので、できるだけシンプルなバージョンアップを今後考えていきたいと思っています。書くことが

多いと面倒です。できるだけシンプルに。

菅原

連携連絡票を作っていく上で、次第に結束が高まっていった、ケアマネジャーさんと歯科医師が話をするなかで、逆転現象が起きたことがあったんですよね。小松さんと直接電話をして、こういう利用者さんがいて、こうでこうで。じゃあ見に行きます。じゃあ連携連絡票を使いましょうって言ったことがあるんですね。逆転していたのですね（笑）。顔の見える関係が煮詰まっちゃって。普通だったら、連携連絡票を足がかりにして、じゃあいつお話ししましょう。なのに、逆転したことがあって。笑い話じゃないですけど。連携連絡票というのはあくまでもツールで、そういう逆転現象が起きたというのはすごく素晴らしいことだと思ったんですね。

連携連絡票ができてから、まさか8年も経っているとはいませんでしたし、最近はなかなか皆さんで集まって話す機会もほとんどなくなってしまっただけです。連携連絡票のおかげで顔が見える関係になり、逆に力を持って連携連絡票をまたブラッシュアップしていくという日が早く来て欲しいと思っています。

森田

この連携連絡票は、良く練られていますので、最初の理念を忘れずに、当地域で引き続き、皆さんのご協力をいただきながら運用改定していただければと思います。出来ればもっと広がっていけばいいのかなと思います。コロナ禍にあって良かったのは、「非接触型の情報共有」ということですね。医師会の情報も、「全部ウェブでいいんじゃないか。」という先生もいます。未だにFAXは信用できないと。機器から紙が出てくるのは信用できないという先生もいます（笑）。FAXというものを使いながら、コロナ禍であってもそういう関係が築けているというのは、本当に良いことなので、ぜひ進めていただきたいと思います。今後ともよろしく願いいたします。

築場

インターネットで検索すると、県内では黒川地区地域医療対策委員会、白石市、蔵王町、七ヶ宿町からなる一市二町在宅医療・介護連携推進事業連絡協議会、名取市等で、連携連絡票の活用が行われてい